

ただ一軒の牛方宿が残った 牛が陸の船であった塩の道

かつて「信州」の人々にとっては、塩は黄金だった。日本海の糸魚川から姫川沿いに松本に至る三十里（約百二十キ）の道は、大名行列が通ったり、物見遊山の旅人が行き交う派手な道ではなかったが、山国に暮らす人々の生命線、命の塩を運ぶ道だった。

戦国時代の美談として、越後の上杉謙信が、甲斐の武田信玄に塩を送った話は有名である。誇り高き謙信にとって、敵の糧道を断つてまで勝とうとするのは「卑怯」と思えたからだった。

日本海の塩を松本盆地まで運ぶ「塩の道」は、越後の人たちからは松本街道、松本の人々からは糸魚川街道と呼ばれた。また、松本藩の番所があった千国宿にちなんで「千国街道」とも呼ばれた。

「塩の道」というのは、昭和の初めの地理学者・田中啓爾氏の「鉄道開通前の塩の移入路」の研究で取り上げられていろいろのネーミングである。この塩の道は、街道とはいっても名ばかりの道。冬は積雪が三・四尺にもなり、昼なお暗い急坂はただ石を転がしただけ。姫川を渡る吊り橋は目もくらむような難所だった。そんな三十里を、人々は黙々と日本海の塩を松本へと運んだが、その主役が、その背に三十二貫（百二十キ）の塩俵を振り分けられた牛と、そんな牛を一人で六頭も引き連れた牛方たちだった。



牛と牛方たちが、歴史のなかで最も輝いて見え、人と牛とが最もぴったりと呼吸を合わせた時代！ そんなロマンを伝える「牛方宿」は、いまは千国集落のはずれにたった一軒残っているだけである。牛方宿とは、六頭の塩運び牛を引き連れた牛方たちが、その日の行程を終えて一夜を送った専用宿である。

宿と呼ぶにはあまりにわびしいねぐらで、木戸をくぐって中に入ると、左側は牛をつなぐ土間で、右側に「中二階」といった感じの牛方たちの寝場所が、寝台車の棚のようにしつらえられていた。そこからは、寝ていても牛がほどよく見下ろせるようになっていて、土間には牛のためのかいば桶や、牛に与えるワラを軟らかくするために叩く「じょうべし」（石）が置かれていた。

江戸時代、この千国街道には、数百人も牛方たちがいたといわれる。彼らが運んだ「いのちの塩」が、しめてどれほどのものになったのか？昭和三十二年、大系線の開通によってこの塩の道は消えた！